

生命の本質と人間の可能性

～『風の谷のナウシカ』を題材に～

笹谷宗弘（人間学コース）

（指導教員：堂園俊彦）

キーワード：生命、変化、清浄と汚濁、生と死、光と闇と虚無

序章

『風の谷のナウシカ』は、墓所の立てた世界浄化計画が物語の中核となっている。世界浄化計画とは、現在の汚染した世界を、清浄な世界「青き清浄の地」と取り換えるものである。その計画が成就すれば、世界はたくさんの生き物が住み、人間が争いをしなくなる清浄な世界に生まれ変わる。しかしナウシカは、清浄な世界を求めているのにもかかわらず墓所を破壊する。この破壊の根拠となっているのが、ナウシカの生命観である。ナウシカと墓所との対決の場面では、ナウシカと墓所との生命についての考え方が衝突する。

この論文では、なぜナウシカは墓所を破壊したのかという問いを解明するために、ナウシカの生命観を詳細に検討する。それとともに、戦争を起こし世界を汚した張本人である人間が、墓所の救済なしに清浄な世界を作ることができるのかという問いに答えるために、ナウシカが人間に見出した可能性を考察する。

第一章 生命の本質

第一節 ナウシカの生命観 生命の本質と内在性

まず、ナウシカが生命をどう捉えているかを知るために、「目的を持って造られた生態系が生命の本来にそぐわない」、「生命は風や音のようなもの」というナウシカの台詞を考察する。前者の台詞は、浄化という目的のために腐海や蟲をつくった墓所の態度を否定している。しかしこの否定は、人工的な生命の否定を含蓄するものではない。なぜなら、後者の比喩は、生命が外から与えられた目的や役割によって生きるのではなく、それ自体の力で生きるという生命の本質を示しているが、こうした本質は、人工的な生命にも見られるからである。ナウシカは、こうした生命の本質を、死に瀕した子王蟲がなお生きつづけようとする姿に見出している。子王蟲は墓所によってつくられた生物である。このことから、生命がそれ自体の力で生きているということを読み出している。

第二節 ナウシカの生命観 生命の予測不可能性

生命がそれ自体の力で生きるという本質を持っていることは、生命が変わっていくということからも導くことができる。

このことは、自然を思い通りにしようとする人間の計画からの逸脱という形で示されている。生物実験による粘菌の変化、大海嘯での王蟲の愛情など、人工的な生命でも造物主の意図を離れ、変わっていく様子が見られる。科学技術によっても生命の予測が不可能であることを通して、生命が変わっていくということが導き出される。

第三節 墓所の生命観との比較

墓所は、上記の生命のあり方を否定している。墓所の生命観とは汚濁や死、変化の否定であり、それらを排除することで、清浄な世界を創ろうとしている。墓所の貯蔵庫「庭」の場面では、トルメキアの皇子が、おだやかで優しい性格に変わっている。つまり、清浄な部分のみに変貌している。また、世界浄化計画は組み込まれた予定である。これらのことから墓所が、生命が変わっていくという本質を否定しており、それゆえにこそナウシカは墓所を破壊したのである。

第二章 清浄と汚濁、光と闇と虚無、生と死

第一節 ナウシカにとっての清浄と汚濁

第二章では「清浄と汚濁こそ生命だ」というナウシカの台詞から、生命のもう一つの本質、清浄と汚濁について考察する。ナウシカにとっての汚濁の一つ目は、人間の愚かさである。人間は戦争を起こし、復讐をし、生命をもてあそんでいる。二つ目は、「決して癒されない悲しみ」である。これは、悲しむべき現象が世界から決してなくならないということである。つまり、人間の愚行が繰り返して止まないことや、愛の外側の存在、死の存在を指す。愛の外側の存在とは、自分が愛せないもの、自分を愛してくれないものである。

ナウシカにとっての清浄の一つ目は、生の充実・生きる喜びである。二つ目は、王蟲の友愛である。王蟲の友愛とは、他者へのいたわりである。ナウシカは王蟲の友愛、つまり他者へのいたわりを実行している。

第二節 清浄と汚濁、光と闇と虚無、生と死の関係

清浄と汚濁を伴った生命についてより深く理解するために、「いのちは闇の中のまたたく光だ!!」というナウシカの台詞に即して、光と闇と虚無、生と死についても考察する。

まず、闇とは万物の根源であり、すべてのものが帰っていく場所である。つまり闇は虚無や光を生みだすのである。

虚無とは、死を扱うものであるが故に、汚濁に分類される。どちらも人間の一部であり、決して切り離せないものである。

光は、ナウシカの生、つまり汚濁に屈しない屈強な生と、他者への愛に見られる。この生の構えが見られるのは、汚濁を乗り越えた時である。川喜田八潮の表現を借りれば、「闇のエネルギーが虚無と葛藤の内に生氣ある光を生みだす」ということである。つまり、闇を虚無と光との根源としてとらえた上で、汚濁を認め乗り越えた時、真に充実した生＝光が生まれるのである。この真に充実した生、愛とは、つまり清浄である。また、汚濁を乗り越える瞬間に、生命の本質である変化が見られる。

第三節 清浄を目指しながらも汚濁を排除しない理由

墓所は「生命は光だ」としているが、汚濁を排除するこの立場は誤っている。なぜなら、清浄と汚濁は生命の本質であるからだ。つまり、なくすことができないのである。虚無が人間の一部分であることと同様である。そして、もしも汚濁を排除してしまうと、真に充実した生は生まれえない。なぜなら、汚濁との葛藤の間に光が生まれるからである。また、墓所は闇と虚無を同じものだととらえているが、闇も排除してはならない。なぜなら、万物の根源である闇は光の根源でもあるからだ。ということは、闇を排除して生まれた光は、「庭」でのトルメキアの皇子のような、偽りの光、つまりどこか間違った清浄である。つまり大事なことは、闇を源泉とし、汚濁を認め乗り越えていくことなのである。そしてこれこそまさにナウシカの生の姿勢であり、生きることなのである。

第三章 ナウシカは墓所の救済なしにどのように世界を救うのか

第一節 生きるとは変わることに

墓所なしでも清浄の世界を目指すために、ナウシカが見出した人間の可能性とは、どのようなものなのだろうか。

第一章で、生命は変わっていくという結論が導き出された。汚れそのものと思われる人間でも、ケチャやアスベル、ドルクの民のように、実際に変わっていく人達がいる。しかし、彼等はナウシカの説く王蟲の友愛、いたわりを実践しているのではない。彼等が変わることができたのは、汚濁と向き合うことができたからである。ユパの説得がそれを可能にしている。また、汚濁と向き合うことは、王蟲の友愛、いたわりを実践するための第一歩である。なぜなら、清浄は汚濁を乗り越えた時に生まれるからである。

第二節 汚濁との共生

汚濁を排除せずに汚濁と付き合っていく人間の可能性とはなんだろうか。それは、人間は王蟲の友愛、いたわりを持

つことができるということである。風の谷の人々が汚濁との共生を実践している。それを可能にしているのはやはり、王蟲の友愛、いたわりである。そして、その背景にあるのが「私たちの生命は…個にして全、全にして個」という王蟲の思想である。つまり、自分の生が他の存在の死によって支えられているということである。王蟲の友愛や森の人、そしてナウシカやナウシカが導いた人々は、この思想を知っていたからこそ、いたわりをもつことができたのである。

第三節 異なる立場 愛の外側の存在

変わることでできない人、汚濁を乗り越えていけない人々はどうすればいいのだろうか。その壁となっているのが、愛の外側の存在である。つまり、自分の民族や家族以外にいたわりをもつことができないのだ。人々が清浄の世界を目指すためには、三通りの方法がある。彼等の可能性を考察するために、その三つの道について考える。

一つ目は、「ナウシカの道」である。ナウシカは、どのような人にもどうしても愛せない存在がおり、自分たちとそうした存在の共生がきわめて難しいことを知っている。しかしナウシカはあきらめずそれらを乗り越え、それらが両立するように努力する。なぜなら、みな同じ世界を共有しなければならないからである。ナウシカのこの姿勢を裏付けるのは、愛である。ナウシカにも愛せない存在はあるが、ナウシカはその存在をも愛するようになることができる。つまり愛の限界を突破することができるのである。これが、「ナウシカの道」である。

二つ目は、「普通の人々の道」である。愛の限界を突破することは容易ではない。彼等が変わる可能性とは理解し合う可能性である。つまり、愛せなくとも、理解し合うことが必要なのである。理解することは、愛の外側の存在、つまり汚濁と向き合うことである。「普通の人々の道」は愛の限界を突破する可能を持っている。なぜなら、汚濁と向き合うことはいたわりをもつための第一歩だからである。つまり、「普通の人々の道」は「ナウシカの道」にも通じている。

三つ目は、「クシャナの道」である。クシャナは、普通の人々より愛の範囲が狭い。愛の外側の存在をより知っているということである。しかし、それは逆に愛の範囲内の存在には深い愛を注ぐことができるということでもある。それらのことから、クシャナは、清浄と汚濁を深く理解している。必要なことは、その理解を清浄に生かすことである。「クシャナの道」もまた、「ナウシカの道」になることができるのである。

終章

生命の本質とは、その内在的な力により、変わっていくことである。また、生命とは清浄と汚濁である。この二つの生命の本質が示唆することは、人間も、汚濁を乗り越え、清浄に変わっていけるということである。